〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 54　183～192（2016）〕

大学附属児童図書館の展望
―６館の比較を通して―

岩　田　英　作　　マユー　あ　き
（総合文化学科）

Prospects for University-Affiliated Libraries for Children
― A Comparison of Six Libraries ―

Eisaku IWATA, Aki MAHIEU

キーワード：絵本、子育て支援、地域連携
Picture books, child-rearing support, cooperation between college and community

１．はじめに

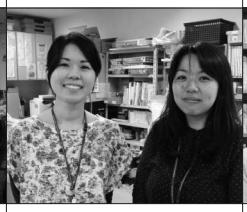
島根県立大学松江キャンパスでは、絵本の読み聞かせを大学教育に取り入れて、2015年で10周年を迎えた。

2010年には、その活動拠点として学内に児童書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を開設し、絵本の貸出しや学生による読み聞かせを通して、学内外の交流の場となっている。

大学附属の児童図書館は、筆者の調べによると全国でも10館に満たない。お互いの存在を強く意識することもなく、それぞれがそれぞれの地域で独自に活動しているのが現状である。

筆者は、2014年度に、以下の代表的な５館について視察を行った。本レポートでは、これら５つの児童図書館の特色を明らかにし、大学附属児童図書館の今後を展望したい。

視察対象の大学附属児童図書館とおはなしをうかがったみなさま

北海道武蔵女子短期大学児童図書室 1976～	京都造形芸術大学芸術文化情報センターピッコリー 1978～	鳴門教育大学附属図書館児童図書室 1987～	山梨大学附属図書館子ども図書室 2002～	関西大学児童図書館（高槻市立中央図書館ミューズ子ども分室） 2010～
				
図書館係長 玉田清市さん 司書 柳橋　望さん	司書 大橋　慈さん（右） 司書 三浦真衣さん	鳴門教育大学名誉教授 初代室長 佐々木宏子先生（左） 専属事務補佐員 森下雅子さん	室長 鳥海順子先生（左） 専門委員 塚越奈美先生	代表 門田雅子さん

２．大学附属児童図書館それぞれの特色

１）北海道武蔵女子短期大学附属図書館児童図書室

札幌市北区に位置し、1976年（昭和51）開設。大学附属の児童図書館としては最も古い。蔵書約21000冊。図書館職員（司書）２名と学生ボランティアで運営。1991年までは地域に週２日開放していたが、現在は毎週金曜日13：00～17：00の１日のみ。

（１）多彩な学生ボランティア活動

1976年開設当初、年間3000人を超えていた地域利用者も徐々に減少して2000年には500人までになった。ところが、2003年を境に一転増加に転じ、2005年以降は1500名程度の利用者をキープしている。2003年に、いったい何があったのか。それは、学生ボランティアの活動がこの年から始まり、その結果として利用者増につながったと思われる。この学生ボランティアの活発な活動こそが、武蔵女子短大児童図書室の大きな特徴となっている。

児童図書室に関連する学生ボランティアを挙げてみると、「武蔵としょかんまつり」「武蔵祭（大学祭）」「クリスマス会」の企画・参加、「児童図書室装飾」「月イチ特集～いちごいちえ～（絵本のポップづくり）」「えほんくらぶ（布絵本・おもちゃづくり）」「はなうさぎ（おはなし会）」「児童図書室お手伝い（児童図書サービス全般）」と、実に盛りだくさん。

学生は学科を問わずだれでもこの中から自由に選んで参加することができる。年度によって多少のばらつきはあるものの、2014年度は38名の学生が参加した。このボランティア活動を通して、児童図書室の支援と学生の育成を見事に両立させている。

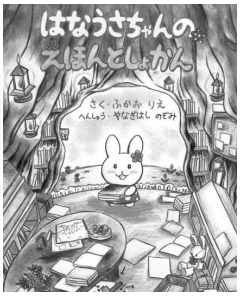
（２）英語教育との連携

日本語と英語の両方が揃った絵本を約250冊所蔵し、両者を並べて開架している。学生の英語教育への活用が第一義だが、幼児・児童の英語教育の高まりもあって一般の貸出も多い。ハンディーな「英語・日本語対応絵本リスト」も作成し、利用を助けている。しかも、日本語タイトル五十音順、英語タイトルアルファベット順の２種類がある。

日本語と英語の両方がそろった絵本を左右に対応させて配架。

（３）図書館グッズを利用した読書促進

読書ノートがたまるごとに、ブックマーク、クリアホルダー、ブックカバーなど、オリジナルの図書館グッズがもらえるのも武蔵ならではアイディアである。学生にも子供にもうれしい企画だ。



児童図書室オリジナルの絵本。作者は元学生ボランティア。

2）京都造形芸術大学芸術文化情報センター「ピッコリー」

京都市左京区北白川（京都市街北部）に位置し、1978年開設。蔵書約18000冊。常勤司書２名、非常勤スタッフ３名（広報紙・ＨＰ作成）で運営。開館は、木～土10：30～18：00　日10：30～17：00。徒歩や自転車での利用者がほとんどで、近隣地域にはおなじみのこども図書館である。

（1）芸術大学になぜこども図書館なのか

これはひとえに大学創設者である徳山詳直（とくやましょうちょく、1930～2014）の意思によるものである。徳山は、「教育が18歳からいきなり始まるわけではない」として、幼児段階からの教育にきわめて関心が高かった。また、徳山には「芸術とは何か？　不幸な人を少しでも幸せにするために芸術はある」という言葉がある。この、子どもと社会に対するまなざしが相まって、地域に開放された子ども図書館が京都の地に誕生したのである。

（2）多彩な催し

ピッコリーでは、毎週のように金・土・日の３日間には、さまざまな催しが行われる。子どもを対象とした「おはなし会」のほかに、親子でおはなしを楽しむ「おはなしクラブプー横丁」や「ブックトークのじかん」がある。それ以外にも、「映画上映会」や「工作会」、乳幼児と保護者のふれあいをうながす「トットクラブ」というのもある。本を中心としながら、そのカテゴリーにこだわらず、ゆるやかな幅をもって親子を支援しようとする姿勢がピッコリーの大きな特徴である。

←木のおもちゃ
↓工作道具

子どもへのアプローチの柔軟さが表れている。

（3）ピッコリーネットワーク

これらの豊富な企画を実施していくために、「ピッコリーネットワーク」と呼ばれるつながりが形成されている。具体的には、学外の「京都おはなしを語る会」や「京都科学読み物研究会」の会員が上記の様々な催しを支援している。京都は昔から家庭文庫が盛んで、地域で読書を支える伝統がこのネットワークにも受け継がれている。

（4）ひとりひとりの貸出し記録

ピッコリーでは本来の読書支援にも一工夫がなされている。利用者一人一人について貸出し記録をカードに付けている。これによって、子ども一人一人の貸出の量（冊数）と質（読書傾向）を把握することができ、よりきめ細かいレファレンスが可能となる。

ピッコリー読書記録カード。
カードがいっぱいになると特製しおりをプレゼント。

3）鳴門教育大学附属図書館児童図書室

鳴門市郊外に位置し、1987年開設。国立大学（当時）の附属図書館に設置された児童図書室の第一号。蔵書約16500冊で、英語や韓国語の絵本も充実している。「児童文化研究会」を中心とする学生ボランティアと児童図書室専属事務補佐員１名で運営。開室は、水、土、日、祝日13：00～16：00。

（１）すぐれた児童図書の収集と絵本データベース

選書は開設当初より、大学の児童図書室としての独自性を発揮するためにも、質の高いものや古典として残りうる児童図書の収集を原則に、現在は、児童図書室専属事務補佐員の方が選書を行っている。複本はほとんどなく、一点物がほとんどである。

また、「子どもの心を理解するための絵本データベース」は、後述する佐々木宏子氏を中心に、絵本を子どもの発達という視点から主題分析を行って構築されたものだ。学内および学外の研究者はもとより、院生・学生の研究に利用されているという。

（２）学生が現実の子どもと触れ合える場

児童図書室開設に尽力され、初代室長も務められた佐々木宏子氏（現鳴門教育大学名誉教授）は、教員をめざす学生には、大学の教育課程の中で教えるために必要な知識と技術を修得することに加え、もう一つ大事な学びがあると考えている。

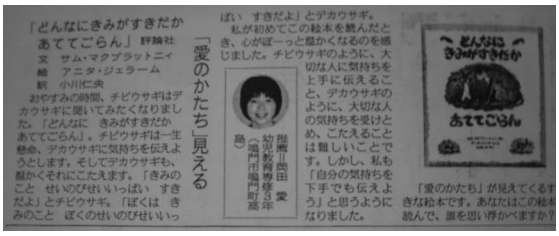
それは、学校教育の場とは異なる日常生活の延長で子どもと直に触れ合うことを通し、子どもを丸ごと掴み、実感できる機会を持つことである。地域に開かれた児童図書室は、大学の教育課程の枠の外で、学生それぞれが子どもや保護者との交流経験を通して実践的に学び、子どもという存在への理解を深める場となっているのである。

（３）子育て支援の場

児童図書室では、1999年度より、日常的な「地域の子育て支援」をその目的の一つとして明確に掲げ、活動に取り組んでいる。母親が幼い子どもを安心して連れて来ることができる場所として、また、他の親子や学生との触れ合いを通して狭く閉じられがちな母子関係を拡げる場として、ここで「図書館デビュー」を果たした親子は、何組にもなるという。

わらべうた講習会の様子（平成23年）

具体的な活動としては、毎週土曜日のおはなしの時間のほかに、学生ボランティアの企画による季節行事は、人形劇サークル「ころぼっくる」の協力も得て、人形劇・パネルシアター・手遊び歌・工作など内容も多彩である。また、地域ボランティアとの連携による「わらべうた講習会」は、子どもを持つ保護者に好評で、2003年度から毎年４回の連続講座として開催されている。毎回、子どもたちの歓声が聞こえる楽しい講座だ。



「愛のかたち」見える

「どんなにきみがすきだか あててごらん」評論社
文　サム・マクブラットニイ
絵　アニタ・ジェラーム
訳　小川仁央

おやすみの時間、チビウサギはデカウサギに聞いてみたくなりました。「どんなに　きみがすきだか　あててごらん」。チビウサギは一生懸命、デカウサギに気持ちを伝えようとします。そしてデカウサギも、温かくそれにこたえます。「きみのこと　せいのびせいいっぱい　すきだよ」とチビウサギ。「ぼくは　きみのこと　ぼくのせいのびせいいっぱい　すきだよ」とデカウサギ。

私が初めてこの絵本を読んだとき、心がぽーっと温かくなるのを感じました。チビウサギのように、大切な人に気持ちを上手に伝えること、デカウサギのように、大切な人の気持ちを受けとめ、こたえることは難しいことです。しかし、私も「自分の気持ちを下手でも伝えよう」と思うようになりました。

岩崎＝岡田　愛
幼児教育専修３年
（鳴門市鳴門町高島）

「愛のかたち」が見えてくるす
きな絵本です。あなたはこの絵本
読んで、誰を思い浮かべますか？

地元紙に掲載された学生が書いた絵本紹介記事

4）山梨大学附属図書館子ども図書室

国立大学（当時）では、鳴門教育大学に次ぐ児童図書室として2002年開設。附属図書館３階の会議室からスタートし、現在は別棟の書庫を改装して移転。蔵書約4400冊。学生ボランティア（35名）で運営。開室は、月・水・土13：00〜16：00。

（１）学生ボランティアによる運営

附属図書館の事務職員の方からのサポートもあるが、子ども図書室の実質的な運営は、学生ボランティア主体で行われている。このことが子ども図書室の大きな特徴であり、また、利用者にとっての魅力にもなっている。

学生ボランティアのおもな活動は、週３回の開室日の担当と、子ども図書室の誕生会、七夕まつりやクリスマス会など季節に応じたイベントの開催である。開室日の担当業務は、図書室の開錠に始まり、本の貸出や整理、簡単なレファレンス、来室した子どもへの読み聞かせや工作遊び、そして最後に業務日誌への記録、閉室時の見回り、施錠で完了する。学生同志でお互いの都合を調整し、２人体制のシフトを組んで担当している。

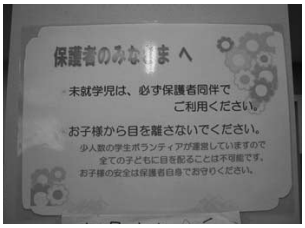
別室に設けられた居心地のよさそうな「読み聞かせ室」

（２）大学教育とのつながり

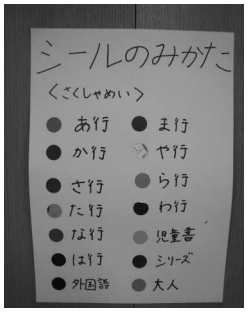
学生のボランティア活動を後押しするものとして、子ども図書室が教育人間科学部の教育ボランティア活動の施設として登録されている点があげられる。この制度により、学生は子ども図書室の活動に継続的に参加することで、社会参加実習の単位（年間１単位）を取得できる。ボランティア活動が教育の中にうまく組み込まれている事例であろう。

←本棚側面に貼られている折り紙の折り方

↓室内に掲示されている保護者へのお願い



（３）山梨県との共同事業「子どもの読書活動推進スキルアップ講座」



本の分類を色シールでわかりやすく表示

2007年度から山梨県との連携事業「地域の子どもたちへの読書活動の推進」を行っている。具体的には、日頃の子ども図書室の運営を通した子どもの読書推進に加え、学校司書や司書教諭をはじめ、地域で子どもの読書活動に携わる様ざまな人たちのスキルアップを目的とした講座を企画・実施している。毎年設定されるテーマ（例：2014年度「子どもと読書活動をつなぐ」）のもとで組まれた５回の連続講座を、外部講師と山梨大学の教員が担当する。大学の地域貢献としての事業ではあるが、子ども図書室の学生ボランティアにも研修の機会を提供し、時にはシンポジウムのシンポジストとして参加させるなど、学生自身の学びの場ともなっている。

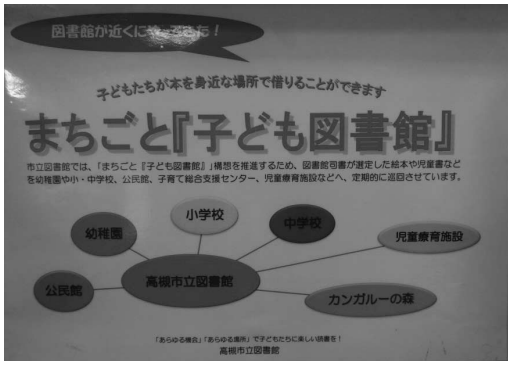
５）関西大学児童図書館

（高槻市立中央図書館ミューズ子ども分室）

2010年、関西大学高槻キャンパスのビルの１階に開設した。高槻市と関西大学の共同経営で、市職員１名、司書３名、ボランティア５名で運営。蔵書約23000冊。開館は、月～土10：00～17：00。

（１）まちごと「子ども図書館」

高槻市では、2006年より「まちごと『子ども図書館』」を掲げ、子どもの身近に本がある環境づくりに市一体となって取り組んでいる。



具体的には、ミューズを含む３館を「子ども読書支援センター」と位置付け、市内の学校図書館（幼稚園・小中学校）、公共施設（公民館、子育て支援施設）、各家庭と連携して、図書の団体貸出などを行う。

高槻の駅を降りると、そこから関西大学まで歩行者専用通路が整備されており、市と大学の一体的なまちづくりを肌で感じることができる。「まちごと『子ども図書館』」もまさにその一環であり、これからの大学のあり方を考える上で参考となる。

（２）充実したおはなしの時間

ミューズでは、開館日には毎日おはなしの時間がある。月～土10：40～11：00には「おはなしきしゃぽっぽ」（０～３歳向け）、土14：00からは「おはなしふうせん」（４歳以上向け）、そのほか毎月第２水曜日には「おりがみであそぼう」もある。ミューズでは、これらを学生や学外ボランティアには頼らず、ミューズのスタッフで分担している。

筆者が訪問したのも平日の午前であったが、「おはなしきしゃぽっぽ」に10組程度の親子連れが参加していた。比較的若い母親が多く、リピーター率も高いとのことだ。親同士、また利用者とスタッフが自然と顔なじみになり、子どもの成長をスタッフも見守ることができる。本についてのやりとりだけでなく、子育ての話題などでお母さんたちとゆったり話のできるところがミューズ子ども分室の持ち味である。

おはなしのじかん
平日でも10組前後の親子が楽しむ。

棚の上や壁面には折り紙で作った人形や飾りがたくさん飾られている。

（３）「とかいなか」構想

高槻市では都会と田舎の良い面をあわせもったまちづくり「とかいなか」を推進しているとミューズでうかがった。高槻の駅周辺はいまや開発ラッシュで、高層マンションが立ち並ぶ。「とかいなか」を求めて、子育て世代の流入もそれなりにあるのだろう。ミューズの利用者が多い背景には、そのような事情も影響しているだろうし、さらには、保育所の待機児童の問題も一方であるのかも知れない。

３．大学附属児童図書館の展望

北海道武蔵女子短期大学附属図書館児童図書室をはじめとする５つの大学附属児童図書館について、それぞれの特色を見てきた。この５館に島根県立大学松江キャンパスの児童書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を加えて、大学附属の児童図書館の今後の姿を展望してみたい。

１）地域の〈子育て支援の場〉として

６館を通して言えることは、それらが各地域において重要な子育て支援の場として機能している点だ。子育て支援を明確な目標として掲げる鳴門教育、地域に密着し多彩な催しで子育て支援を行なう京都ピッコリー、毎日のおはなし会で親子を支える関西ミューズなど、それぞれの地域の実情に応じて柔軟に対応している姿が見られる。

保育所の待機児童の増加など、乳幼児の子育て事情に課題も多い中、大学がそのことに対してどのように向き合うかを考えた時、大学附属の児童図書館の果たす役割は極めて大きいと思われる。

２）大学の〈教育・研究の場〉として

大学附属の児童図書館ならではの取組として、絵本の英語教育活用（北海道武蔵）、絵本データベースの構築・研究利用（鳴門教育）などがある。京都ピッコリーの芸術面からの絵本利用や科学絵本への着眼などは、絵本が様々な教育研究領域とつながりうる可能性を示唆するものだ。

おはなしレストランライブラリーも、そもそも読み聞かせを通した学生の人間教育のために誕生したもので、大学教育とは不可分の関係にある。従来、大学図書館は「研究のための図書館」のイメージが強かったが、ラーニング・コモンズの導入などにより活用の仕方も幅が広がっている。大学附属の児童図書館も、その幅を広げる一要素として、教育や研究への活かし方について大学全体を見渡しながら考えてみるとよいのではないだろうか。

３）大学と地域の〈交流拠点〉として

教育・研究と並んで、今日の大学には地域貢献が強く求められている。大学附属の児童図書館は、それを肩肘張らずに、あるぬくもりを持って実現している場ではないだろうか。図書館で子どもと学生が絵本をはさんで向き合っている風景に接すると、誰かからの押し付けではない、人と人のあたたかい血の通った〈交流〉の姿をそこに見る思いがする。

鳴門教育大の報告に述べた、地域に開かれた児童図書館が「学生それぞれが子どもや保護者との交流経験を通して実践的に学び、子どもという存在への理解を深める場」であることをいま一度かみしめたい。

４）学外諸機関との〈地域連携の場〉として

学外の読書研究会と独自のネットワークを構築している京都ピッコリー、山梨県と連携して子どもの読書推進をはかる山梨大、市と大学で共同運営の形態をとる関西ミューズなど、児童図書館を維持し機能の拡充をはかるために学外との様々な連携が見られる。

おはなしレストランライブラリーにおいても、平成24年度より「島根子ども読書活動推進会議」（島根県）と協力して、父親による絵本の読み聞かせの啓発として「読みメン道場」を始めたところだ。

４．おわりに

視察を行なった５つの大学附属児童図書館について、以上述べた特色は、紙幅の都合もあって、概要にとどまる。それぞれの館のすばらしさについて、書ききれなかった点、あるいは見落としている点がまだたくさんあろう。視察でお世話になった皆さまへの感謝の念とともに、このレポートが６館の発展と連携に少しでも役立つことを願う次第である。

５．参考文献

鳥海順子・塚越奈美（2012）「山梨大学附属図書館子ども図書室の現状と課題」（『山梨大学教育人間科学部紀要』第14巻, pp. 279-287.）

鳴門教育大学附属図書館児童図書室（2006）『地域に開かれた鳴門教育大学の児童図書室　―20年のあゆみ―』

おはなしレストランライブラリーの詳細については、岩田英作（2012）「おはなしレストランライブラリーの取組－読み聞かせ活動を通した地域との交流拠点として」（『近代文学試論』第50号、広島大学）を参照されたい。

北海道武蔵女子短期大学
附属図書館児童図書室

◆設立 1976 年（昭和 51 年）6 月

◆スタッフ
司書 2 名。学生ボランティア数名。

◆所蔵冊数 21,221 冊（H25 年度）

◆月平均利用者数 117 人（H25 年度）

◆月平均貸出冊数 526 冊（H25 年度）

◆年間購入冊数 243 冊（H25 年度）

◆選書の仕方
定評のある作家やシリーズなど、絵本紹介の本や読み聞かせ雑誌などを参考に選書している。評価が分かれるものなどはできるだけ読んでから判断している。

◆配架の仕方
絵本のタイトル 50 音順。読み物は分類順。小説は作家の 50 音順。
MOE 絵本屋さん大賞の本を通年で展示。
図書館ボランティアの学生による月に一度のテーマ展示。
表紙の見える絵本架には季節に合うものを積極的に展示。

◆読み聞かせ等の活動
月 1 回のおはなし会。それ以外は、子どもたちの要望により随時読み聞かせを行う。
ブックトークはしていないが、本の紹介を受けた際はどんな本か説明しながら紹介している。

◆司書と利用者のかかわり方
来館者には「笑顔であいさつ」を大切にしている。
どの利用者にも必ず声をかけている。その流れで自然にレファレンスに展開していく場合が多い。
常連の利用者にはレファレンス目当ての人、ボランティアで読み聞かせをしている人も多く、絵本について情報交換を行っている。
レファレンスの際には、子どもの年齢や好みを聞いて要望に応えられるよう努め、2 回目以降の利用の際にも前回の反応などを聞いて参考にしている。

◆学生と一般利用者のかかわり方
図書館ボランティアの学生たちは、一般の利用者・子どもと、あいさつや読み聞かせ、布絵本やおもちゃなどを通したふれあいを持っている。
そのあいだに、親はゆっくり絵本を選んだりしている姿がよく見られる。

◆今後の課題等
児童図書室のキャパシティーが限られているので、書庫にしまっている本のほうが多く、書庫の拡充が必要。
児童用 OPAC で検索できる範囲が児童図書室内に限られているため、今後は書庫も探すことができるようにしたい。
テーマ別や年代別などの絵本リストは、今後種類を増やしたい。
貸出・返却がたてこむと、レファレンスが中途半端になってしまうことがある。

京都造形芸術大学芸術文化情報センター
「ピッコリー」

◆設立 1978 年（昭和 53 年）7 月

◆スタッフ
司書 2 名。業務スタッフ 2 名。学生アルバイト 1 名。

◆所蔵冊数 18,017 冊（H25 年度）

◆月平均利用者数 1,164 人（H25 年度）

◆月平均貸出冊数 1,291 冊（H25 年度）

◆年間購入冊数 413 冊（H25 年度）

◆選書の仕方
選書会議を月 1 回行う。「長く読み継がれる本」を基準に定評のある作家を中心に選ぶ。実読して判断する。中学生までが対象だが、子どもに関する一般書も若干所蔵する。大学の性格上、アート的な要素のある絵本にも留意している。

◆配架の仕方
絵本は画家名の 50 音順。国内/海外/赤ちゃん（0～3 才）に分けて配架。
小説は作家名の 50 音順。国内/海外で分け、さらに 4 年生以下（幼年）向けと 4 年生以上向けに分ける。
知識の本は NDC に準じた 2 桁の数字で分類。
上記とは別に原書の分類あり。
展示書架があり月替わりでテーマ展示を行う。

◆読み聞かせ等の活動
「おはなし会」（週 1 回）。そのうち月 1 回はボランティア団体による「おはなしクラブプー横丁」。
絵本や科学絵本「ブックトークの時間」（月 1 回）。
附属ホールでの「映画上映会」（不定期、月 1 回程度）。
身近な材料を使った「工作会」（週 1 回）。
乳幼児と保護者のふれあいをうながす「トットクラブ」（月 2 回）。
「春のわくわくおたのしみ会」「地蔵盆」「クリスマス会」（各年 1 回）などの催しもある。

◆司書と利用者のかかわり方
入館/退館時のあいさつは必ず行う。常連利用者が多く、司書との親密度は高い。とくに、工作会など催しでのふれあいが多い。また、館内におもちゃ等を置いているため、その利用を通じ、利用者同士の交流も多い。
リクエストは公には受けていないが希望を直接聞く事がある。レファレンスも多い。

◆学生と一般利用者のかかわり方
登録制ボランティア（60 名以上）のうち、三分の一程度が学生。掲示物の作成や、催しの補助などの活動を通じて、利用者とふれあう。一般の学生は、絵本を造形活動の資料として活用したり、保育士をめざす学科の学生が、子どもとのふれあいを実際に求めて来館することもある。

◆今後の課題等
開架スペース確保のため、除架・除籍のフローを検討中である。

鳴門教育大学 附属図書館児童図書室
◆設立 1987 年（昭和 62 年）
◆スタッフ 「児童文化研究会」を中心とする学生ボランティア 16 名、児童図書室専属事務補佐員 1 名
◆所蔵冊数 16,500 冊（平成 25 年度）
◆月平均利用者数 275 人（平成 25 年度）
◆月平均貸出冊数　275 冊（平成 25 年度）
◆年間購入冊数 411 冊（平成 25 年度）
◆選書の仕方 当初は、選書委員会で選書が行なわれていたが、現在は、児童図書室専属事務補佐員が選書を行なっている。質の高いものや古典として残りうる児童図書の収集を原則にしている。
◆配架の仕方 絵本はタイトルの 50 音順。シリーズものは、タイトルよりシリーズ名を優先して配架。 外国語の絵本コーナー、新着絵本コーナーあり。 科学物はまとめて入口近くに配架。 図書室の入口の隣に大きなガラスのショーケースがあり、季節の絵本やおすすめ絵本を展示できるようになっている。
◆読み聞かせ等の活動 読み聞かせは日常的に学生や児童図書室専属事務補佐員が行なっている。 新しい本を入れた時には、ブックトークを行ない、紹介している。 地域ボランティアによるおはなし会やわらべうた講習会なども開催。 学生による季節行事にちなんだイベント開催。 地元紙『徳島新聞』に学生の絵本紹介が掲載されている（H16 年より）。
◆司書と利用者のかかわり方 児童図書室専属事務補佐員は、利用者の子どもと保護者との対面でのコミュニケーションを大事にしている。 名前はもちろん、個々の子どもの読書傾向も把握している。
◆学生と一般利用者のかかわり方 ボランティアの学生は、利用者の保護者や子どもに対し挨拶を含めてきちんと声かけをする。 子どもには読み聞かせをしたり、一緒に折り紙を折ったり本を探したりと子どもとの関わりを大切にしている。 保護者の中には若い学生と話をするのを楽しみにしている方もいる。
◆今後の課題等 イベントの時だけでなく、普段の日常的な子ども図書室の運営に協力してくれる学ボランティアをいかに広げていくかが課題。 これからの子ども図書館は、漫画やゲーム、映像メディアなどの様ざまなメディアも取り込みつつ、それでも本にはそれらのメディアとは違うものがあることを、子どもたちにきちんと伝えていける場となる必要がある。

山梨大学 附属図書館子ども図書室
◆設立 2002 年（平成 14 年）5 月
◆スタッフ 学生ボランティア 35 名、子ども図書室専門委員会委員 11 名、附属図書館事務職 2 名。
◆所蔵冊数 4,397 冊（平成 25 年度）
◆月平均利用者数 104 人（平成 25 年度）
◆月平均貸出冊数 99 冊（平成 25 年度）
◆年間購入冊数 105 冊（平成 25 年度）
◆選書の仕方 子ども図書室担当の附属図書館事務職員が選書する。その際、利用者や学生ボランティアの要望を考慮する。
◆配架の仕方 新着コーナーをはじめ、仕掛け絵本、大型絵本、紙芝居、読み物（伝記）、のそれぞれにコーナーを設置して配架。 絵本は作家の名前を 50 音の行で分類。さらに、外国語絵本、シリーズもの、大人向け本の分類を加え、それぞれ異なる色シールを張り、子どもにも本が探しやすいよう工夫がされている。
◆読み聞かせ等の活動 利用者の子どものリクエストに応じて、日常的に適宜読み聞かせを行なっている。 子ども図書室の誕生会やクリスマスなどの季節行事に合わせたイベントを開催し、歌や手遊びとともに読み聞かせを行なっている。
◆司書と利用者のかかわり方 司書は不在。
◆学生と一般利用者のかかわり方 学生ボランティアたちは、工作や読み聞かせなどを通して子どもたちと積極的に関わろうとしており、子どもたちも学生との交流を楽しみにしている。 利用者が入室した際のあいさつから始まり、退室する際は「ありがとうございました」と声かけするようにしている。
◆今後の課題等 学生ボランティアの人数の確保が難しく、一部の学生に負担がかかりやすい。 学生の学びの場、実践の場としてさらに充実させることが望まれる。 子ども図書室を広く知ってもらうための広報活動が必要。

関西大学児童図書館 （高槻市立中央図書館ミューズ子ども分室）
◆設立 2010 年（平成 22 年）7 月
◆スタッフ 高槻市職員 1 人、司書 3 人、アルバイト 5 人
◆所蔵冊数 22,678 冊（H25 年度）
◆月平均利用者数 1,810 人（H25 年度）
◆月平均貸出冊数 6,329 冊（H25 年度）
◆年間購入冊数 400 冊（H25 年度）
◆選書の仕方 TRC 新刊案内を毎週見てチェックしている。 郷土作家の作品はチェックするようにしている。
◆配架の仕方 分類順に配架。なるべく別置しないようにしている。 ただし、怪談レストラン、学校の怪談、徳間アニメ絵本、昔話絵本は別置。 赤ちゃん絵本は、きしゃぽっぽコーナーに置き、靴を脱いで親子でゆっくり楽しめるようにしている。 書架は低くして、面出しができるようにしてある。 各書架にかわいい動物や果物のイラストを描いたり、折り紙のオブジェを壁面等に置いて、楽しい空間づくりを心掛けている。
◆読み聞かせ等の活動 0～3 歳対象の「きしゃぽっぽ」（開館日毎日月～土）。 4 歳以上対象の「ふうせん」（毎週土）。 保育所等から団体で来館の折には臨時おはなし会。 学校訪問等でのブックトーク。
◆司書と利用者のかかわり方 来館・退館時には声かけをする。 どういう本を求めているか、よく話を聞き、それに応じて対応する。必ず数冊用意し、利用者に選んでもらう。 毎日開催しているおはなし会「きしゃぽっぽ」の利用者には、リピーターの親子連れも多い。自然と顔なじみになり、子どもの成長をスタッフも見守ることができる。 本についてのやりとりだけでなく、子育ての話題などでお母さんたちとゆったり話のできるところがミューズ子ども分室のよいところだと思う。
◆学生と一般利用者のかかわり方 ミューズ子ども分室が企画して学生ボランティアを募集し、土曜日のおはなし会を共催で行っている。
◆今後の課題等 時々、お母さん方の話し声が大きくなって、マナーの悪い時がある。 閉架のスペースが少なく、開架に置く書籍もほぼ満杯で限界に達しつつある。 事務スペースが狭く、館内に休憩をとる場所がない。

島根県立大学松江キャンパス 「おはなしレストランライブラリー」
◆設立 2010 年（平成 22 年）4 月
◆スタッフ 司書 2 名、教員 2 名、非常勤講師 1 名。
◆所蔵冊数 11,164 冊（H25 年度）
◆月平均利用者数 1,153 人（H25 年度）
◆月平均貸出冊数 3,227 冊（H25 年度）
◆年間購入冊数 3,256 冊（H25 年度）
◆選書の仕方 できるだけ事前に読んでから購入の有無を決めている。 また、定評のあるものは複数冊入れるようにしている。
◆配架の仕方 ジャンル分けの配架。 「恐竜」「乗りもの」「食べもの」「おばけ」など人気のある絵本や、季節ごとのテーマに合わせて展示。 幅広く、多くの方に絵本を楽しんでもらうために、赤ちゃん絵本、小学校高学年向け、お父さん・お母さんにお勧めの本などのコーナーを設けている。 郷土図書コーナーも設置。 ジャンル分けをしていない絵本は、画家名順に配架。
◆読み聞かせ等の活動 学生による「おはなしのじかん」（毎週日曜日）。 幼稚園、小学校などからの団体での来館時。 季節の行事に合わせた学生による「おはなしのじかんスペシャル」（たなばた、大学祭、クリスマス、卒業前） 地方紙『山陰中央新報』で、紙上ブックトーク。 来館した個々の子どもに対しての読み聞かせは、求めに応じて随時行っている。
◆司書と利用者のかかわり方 来室・退室の際には、必ず声かけをしている。特に、子どもの名前はすべて覚え、必ず名前を添えて声かけをしている。 赤ちゃん連れの方、絵本を読んでほしそうな子には必ず声をかける。 本を勧める際には、押しつけにならないよう、ちゃんと話をしてから渡すようにしている。子どもが興味のありそうな本を一緒に探すという気持ちでやっている。
◆学生と一般利用者のかかわり方 自然に、学生と子どもが一緒に絵本を読んだり、ちょっとした遊びをしたり姿は、時々見受けられる。 また、学生と子どもをつなぐよう、こちらから声をかけることもある。
◆今後の課題等 平日の利用者をもう少し増やしていきたい。 常連の方が少しずつ増えてはいるが、もう少し増やしたい。 「おはなしのじかん」の際に、保護者の方でマナーに問題がある場合が時々ある。 現在利用してくれている子どもたちが、これから先も継続して来館してくれることを願う。

（受稿 平成27年11月 9 日，受理 平成27年12月24日）